

アウトドアスポーツに情熱をかけてきた私は、生活のために廃棄物処理場の臨時職員として働くことになった。山中という正規職員に怒鳴られながらも仕事に慣れていった私は、やがて同じ臨時職員の佐川がさぼることばかり考えていることに苛立つ。臨時職員の任期が終わりに近づいた年末の忘年会で、佐川は山中たちに激しく糾弾された。それを止めに入った私は、処理場の事務員として働いていた悠美と付き合っていることを非難され、山中たちと睨み合うことになった。外に出た私は、処理場の隅でゴミに火をつけようとしていた佐川を見つけ、突き飛ばして火事になるのを阻止した。

春になって無職になった私は他の臨時職員と何でも屋を始めるがうまくいかず、悠美との関係も気まづくなっていった。やがて、その会社を廃棄物処理場のOBである志村が、自分の子会社として引き取り、若い社員も入ってきた。新会社に馴染めない私に対して、事業本部長に就任した佐川は厳しく当たるようになった。何もかもうまくいかなかった私は、海辺に寝転んで、会社を辞めること、自分一人の道を模索することを決意した。